

米軍のカンボジア反革命進攻粉碎？ 日帝のアジア会議参加阻止？ 日帝の70年代アジア侵略反革命の拠点作り＝大阪港軍港化阻止？ 本日 大阪港中央突堤 人民集会に結集せよ！ (66 大阪港中央突堤 地下鉄下車)

全市大の學友諸君、今や、情勢は、米帝のインドシナ全域にわたる反革命戦争の本格的突入をもつて極度に、緊張している。ベトナム戦争のベトナム化をもつて、その内部の矛盾、すなわち、民族解放戦争の高揚、発展によつて、必然的に打倒化されてくる世界通貨危機、これを自国の植民地を陥れることにより、回避、延滞しようとするのが、それとも、植民地における民族解放戦争の世界的連鎖にあくまで反革命的に対応するの々、といった、まさにインドシナを陥れるの々、ドル危機を防衛するの々、といった根本的な鋭い矛盾を内面的に突きまぜつつ、アメリカ帝国主義は、ちや、それに代わりうる帝国主義国がないという、世界帝国主義そのものの弱みによつて、インドシナ反革命戦争の拡大、即ち、カンボジアへの侵攻という狂気じみた等々に、あえて公けられねばならぬところに追いこまれたのであり、それは、帝国主義者たちの破滅への速道を速に速めることになるだろう。そして、現実に、すでに、この米のカンボジア侵攻は、全世界の革命的人民に底知れぬ憤りと、怒りをさまさせ、こいつ、特に、アメリカ本国に於ては、米軍のカンボジア侵攻に身をもつて抗議をしようとした、オハイオ州リント文学の學友に対して、州兵が発砲、四人を射殺するといふこと、それこそ狂気としを言ひようのない犯罪に於いて、左翼な、アメリカ人民が直接、斗争に立ちあがりつつある。それは、青年、学生の嵐のような斗争へ立ち上らせ、具体的な階級斗争として、うけつがれ、発展してゆくであろう。

我々、日本反帝派は、かなるアメリカの青年、学生と眞の連帯をしつつ、不抜の拠点、をこの日本の中に打ちたてなければならぬ。

諸君、次に我々は、かなるインドシナの情勢の緊迫化という現実の中で、日米同盟、青明止后、緩慢ではあるが、着実にその野望を實現すべく、社会、政治、文化のあらゆる領域において、夜成「革新」をその支配の体制的補完物としながら、具体的、全面的に帝国主義的再編をおし進め、日本独占又ル「アジ」の動向を、インドシナ情勢の危機という局面と直線的つながりに於て、しかも、我々にとって極めて、重大な問題として考へ上つてきこえる大阪港軍港化という事実をどうとらへて、総合的に把握すること、今日求められているというこを認識しようではないか。

それは、大阪港軍港化という事実はどういう形で、あらわれつつあるのか。それは、米日同盟の全体像はつなめないうも、一方向を向いて、参戦日を含む「武」の軍艦の大阪港への入港、或いは、産軍複合体建設の過程を垣間みせる軍事使用、武器工運へト私製作所」という形で、又、「近畿圏整備計画」の名のもと、大阪港に、石油コンビナート基地をつくり、公団方式で、コンテナ埠頭を建設しようという彼らの意図の中に、はつきり現われているだろう。では、なかなかなる動きが現実化しているのだろうか。それは、大阪港が革命のアジア太平洋を向いているが故に、日本帝国主義者にとって、港は、武装されていることが本質的な問題だからである。

こうした視座にたつのであれば、我々は、なつて既知が、「マラッカ海峡防衛論」なるものを望むと、公言してははかなかつた意思をも、見通せるであろう。

諸君、今や、大阪港の軍港化への動きは、全国における基地網の再編、とりわけ、奥面におけるそれ、すなわち、淡路島、加太島の建設、あいは野における三サイル基地の設置、宇治、大久保、八尾自衛隊基地の強化といふ流れの中で、徐々に連環を速めつつ、文字通り、アジアへの本格的、軍事的な極端な進軍地としての姿に変わつてゆくであろう。

我々、日本反帝派は、帝国主義者たちの、ほしきままの軍動を許してはならない。今や、昨秋安保法改正によって、わが反帝派は、なちえに軍的な教育を受け、内閣化するべき時なのだ。拙劣的言辭を語るのには、もうよそで、退屈するだけ、諸君、今日の反帝派の集会に一大結集、はなろうとではないか。